

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

The Crossing -ザ・クロッシング- Part I (太平輪 乱世浮生 (前編) / The Crossing)

2014年 / 中国映画
配給: ツイン / 129分

2019 (令和元) 年6月7日鑑賞

シネマート心齋橋

Data

監督・脚本: 呉宇森 (ジョン・ウー)
出演: 章子怡 (チャン・ツイイー)
／金城武 / 宋慧喬 (ソン・ヘ
ギョ) / 黃曉明 (ホアン・シ
ャオミン) / 佟大慶 (トン・
ダーウェイ) / 長澤まさみ /
黒木瞳 / 楊祐寧 (トニー・ヤ
ン)

👁️👁️ みどころ

「中国のタイタニック」と呼ばれた大型客船「太平輪号」の沈没は、1949年1月27日。当時の船内は「国共内戦」の難を逃れる乗客と過積載の荷物であふれかえていたようだ。1912年4月14日のタイタニック号の沈没原因は巨大な冰山への衝突だったが、さて太平輪号は？

ジョン・ウー監督がどうしても描きたかったのは、激動の時代に展開された3組の男女たちの悲恋。ジャックとローズは身分違いの恋だったが、本作の男女たちは？

壮大な大河ドラマの「Part I」は人民解放軍 vs 国民党軍の大激戦からスタート！さあ、過酷な時代状況は、恋人たちをいかに切り裂いていくの？そして、運命の糸はなぜ3組の男女をあの大平輪号に・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■あの大作がやっと日本の映画館で公開！■□■

ネット情報とは便利なもの。そして、中国はその方面の先進国。したがって、中国映画は基本的にパソコン上でネット配信される映画サイトで自由に観られるようになっている（もともと、近時はかなり規制が厳しくなっているらしい）。そのため、私は侯孝賢（ホウ・シャオシェン）監督の『黒衣の刺客』（15年）やジョン・ウー監督の『太平輪（前編）』（14年）、『太平輪（後編）』（15年）もパソコンで観ていた。しかし、自分のデスクで小さいパソコン画面で観る「映画」はそれなりの音響効果はあっても、所詮感動には限界がある。したがって、「伝説的巨匠ジョン・ウー その愛と命と人生をかけた歴史超大作！！」については、いつか映画館の大スクリーンで観たいと願っていたが、それが今回ついにシネマート心齋橋で実現。しかも、前編（乱世浮生）と後編（彼岸）を1週間ずつ続けて公開し

てくれるというからありがたい。チラシには、『レッドクリフ』から10年一「巨匠ジョン・ウー渾身の大河ロマン、遂に日本上陸!!」と書かれているから、こりゃ必見!日本中がその興奮と感動に沸くはずだ。

そう思って、1ヶ月程前から楽しみにしていたが、『キネマ旬報』2019年6月下旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」によると、3人の映画評論家の採点は、何と星2つ、3つ、3つと低い。翻訳家、篠儀直子氏は「登場人物の掘り下げがなく、ありきたりのメロドラマの型をなぞる何の味もしないストーリーが進んでいくだけで、映像の華麗さはひたすら空虚さと呼びこんでしまい、これでは誰も後篇を観たくならないのではと心配になる。」とまで酷評しているから、アレレ……。いやいや、そんな評価は気にせず、やっぱり映画は自分の目でしっかり鑑賞しなくちゃ……。

■□■冒頭は、「国共内戦」の激闘を国民党軍の視点から■□■

「大東亜共栄圏」と「五族協和」を唱えた「あの戦争」に敗北した日本は、1945年8月15日から一気にマッカーサー率いる占領軍の下での平和化と民主化が進んだ。しかし、日本軍を大陸から追い出した戦勝国、中国では、それまでの「国共合作」によって共同していた蒋介石率いる国民党と毛沢東率いる中国共産党との「国共内戦」に突入し、同じ民族同士の殺し合いが続いた。そんな国共内戦下での「革命烈士秘伝」をテーマにした名作が、馮小剛（フォン・シャオガン）監督の『戦場のレクイエム』（07年）（『シネマ34』126頁）だった。去る5月15日に観た同じフォン・シャオガン監督の『芳華』（17年）でも、国共内戦の姿が描かれていた。戦闘シーンの迫力で有名な名作の1つがスピルバーグ監督の『プライベート・ライアン』（98年）だが、『戦場のレクイエム』の戦闘シーンはそれに勝るとも劣らない迫力だった。もともと、この両者は中国人民解放軍の立場から国共内戦を描いたものだったが、ジョン・ウー監督の本作の冒頭は、国民党の将校、雷義方（レイ・イーファン）（黄曉明（ホアン・シャオミン））の立場から国共内戦を描いたもの。CGに頼らずすべて実写撮影を敢行したという冒頭の砲撃、爆発シーンの迫力はとにかくすごい。抗日戦を勇敢に戦って国民党の英雄になった雷義方は、今は国民党の司令官でありながら最前線に立って将兵を鼓舞激励しながら突進し、ついに人民解放軍をやっつけたが、さて、彼我のその後の国共内戦の展開は？戦況の変化は？

本作のパンフレットにある江戸木純氏（映画評論家）の「E s s a y - エッセイ」には、人民解放軍の側からではなく国民党軍の側から描いた本作は、「この作品が今、より厳しさを増す電影局の審査を受ければ通らなかつた可能性さえある。」と書かれている。まさにその通りで、雷義方率いる国民党軍の勝利（＝人民解放軍の敗北）という本作冒頭の戦闘シーンは、今なら上映が許可されなかつた可能性が強い。ちなみに、冒頭の戦闘で勝利した雷義方は、その次は華やかな舞踏会のシークエンスに登場し、美しい富豪の令嬢、周蘊芬（チョウ・ユンフェン）（宋慧喬（ソン・ヘギョ））と出会ってワルツを踊り、相思相愛の中で結婚に至る夢のような美しい物語が展開していくから、まさに幸せの絶頂。しかし、

国共内戦が激化し、北方にいた人民解放軍の南進が続き、上海が国民党軍にとって少しづつヤバくなってくと・・・。

■□■日本語、台湾語、北京語、広東語OKの金城武は適役！■□■

ジョン・ウー監督の『レッドクリフ Part 1』(08年)、『シネマ 34』73頁、『レッドクリフ Part 2』(09年)、『シネマ 34』79頁)で諸葛孔明役を演じた金城武は、1973年に日本人の父と台湾人の母との間に生まれた日本国籍の俳優で、日本語、台湾語、北京語、広東語が万能。他に英語も堪能だから、5種類の言語を自由に操ることができるらしい。本作冒頭の戦闘シーンで、雷義方は司令官として最前線にいたが、金城武演じる国民党軍の軍医である嚴沢坤(イェン・ザークン)は後方で負傷兵の治療に大奮闘。台湾国籍の嚴沢坤は元日本軍の軍医だったが、今は国民党軍の軍医をしているらしい。もちろん、一介の軍医に過ぎない嚴沢坤は、雷義方のような上海での華やかな舞踏会に出席することはなく、国民党の勢力が弱まり、上海から台湾に逃げていく人々が増えていく中、彼も故郷の台湾に戻ることに。台湾には今も嚴沢坤の両親や弟夫婦たちがいたし、沢坤医院はそのまま残っていたから、嚴沢坤は帰郷後すぐに医院を再開することができた。

そうなれば、故郷でのんびりと・・・。嚴沢坤はそう考えたようだが、本作では雷義方が妊娠した妻が静かに暮らせるようにと周蘊芬を台湾に避難させていたから、ある時に周蘊芬が沢坤医院を訪れたことによって、運命のページが開いていくことになる。『タイタニック』(97年)でも、ジャックがローズと知り合うきっかけになったのはジャックが描いたスケッチだったが、本作でも周蘊芬と嚴沢坤を結びつけたのは、嚴沢坤が描いた一枚の絵。周蘊芬の新居となった台湾の日本家屋にはピアノが置いてあったから、ピアニストの周蘊芬にとっては好都合。雷義方のために作曲したいと願いながら、大陸ではなかなか構想がまとまらなかったが、ここなら静かにその構想を練ることができそうだ。そう考えていた周蘊芬がある日、額に飾ってあった絵に着目。これは、すすきの原に置かれた1台のピアノを美しい少女が弾いている絵だったが、そこには「沢坤 昭和17年 晩秋」とサインされており、絵の額裏には「雅子」と記された日記と「秋のすすき」と題された1枚の未完成の楽譜があったから、ビックリ。これは何とかしなければ。そう思っていた矢先にたまたま周蘊芬は沢坤医院に担ぎ込まれたから、こりゃ何かの縁だ。雅子の日記を嚴沢坤に渡し、未完成の楽譜を自分が完成させるべく嚴沢坤からの思い出話を取材した(?)周蘊芬は、その後本作のテーマ曲にもなっている美しいピアノ曲を完成させることに。

中国語(北京語)の勉強を続けている私には、北京語が台湾語や広東語と全く違うことがよくわかる。本作でも周蘊芬と一緒に台湾にやってきた召使いの男が台湾語を全くしゃべれず苦労している姿が印象的だったが、そう考えると、日本語、台湾語、北京語、広東語がOKという金城武の語学力はすごい。これは、嚴沢坤が日本統治下の台湾に生まれた上で医学を志したためだが、本作では『レッドクリフ』の諸葛孔明役以上に金城武が適役！

彼の語学力が大いに威力を発揮することに。

■汚れ役でもチャン・ツイイーは素敵！■

張芸謀（チャン・イーモウ）監督の『初恋のきた道』（00年）（『シネマ5』194頁）でデビューした章子怡（チャン・ツイイー）は、『ジャスミンの花開く』（04年）（『シネマ17』192頁）のような本来の中国人俳優としてのすばらしい役から、「中国版ハムレット」と呼ばれた『女帝 エンペラー』（06年）での若き王妃役（『シネマ17』298頁）、『グラント・マスター』（13年）での拳法の宗師役（『シネマ34』484頁）、さらには近時のハリウッドの大活劇『ゴジラ キング・オブ・モンスターズ』（19年）での博士役まで何でもこなしているが、本作では娼婦役に挑戦！雷義方と結婚する富豪の令嬢、周蘊芬を演じたソン・ヘギョは「世界で最も美しい顔トップ100」に韓国人ではじめて選出され、最高位5位にランクインした超美人だが、本作を観ている限り、私の目にはソン・ヘギョとチャン・ツイイーの顔立ちはそっくり。

それはともかく、国共内戦で激動する上海では、女が一人生きていくことが大変だったことは本作の于真（ユイ・チェン）（章子怡（チャン・ツイイー））を見ているとよくわかる。最初に于真が登場するのは無償で志願する看護師役。これは、出征したまま行方不明になっている恋人・陽天虚を探すための手段だが、残念ながら本作では于真の出自についてはあまりハッキリしない。于真は互いにウィンウィンの関係になるため、見知らぬ兵士、佟大慶（トン・ターチン）（佟大庆（トン・ダーウェイ））と偽りの家族写真を撮るが、それは、于真にとっては、「夫は出征し、子供は母に預けている」と偽って下宿部屋を借りるため。つまり、身分証明書の代わりだ。他方、これから一人戦場に赴く佟大慶にとっては、写真に写る妻の姿は何よりも心の支えになるらしい。そのうえ、それをわかってくれた于真は、別れ際に「死なないで」と言ってくれたから、軍隊勤務の中、佟大慶は次第に于真を本気で好きになることに。もっとも、病院に勤めながら別れた恋人を探すという于真の目的は容易に達成できないまま、生活に困窮していく于真はついに娼婦に身を落としてしまうことになるから、それに注目！

本作では、雷義方の妻となった周蘊芬は終始美しいファッション、美しい化粧で登場するのに対し、周蘊芬とそっくり顔の于真は、終始汚れ役。さすがに娼婦として身を売っているシーンをモロに見せることはないものの、同じ顔立ちの美人なのにソン・ヘギョとチャン・ツイイーの差は歴然としている。しかし、もともとチャン・ツイイーはチャー美人。しかも、本作では元恋人を探すために今を必死で生きている女という于真役に徹しているから、キラキラとしたその目はやっぱり魅力的。本作では『女帝 エンペラー』や『グラント・マスター』等の役とは全く違う娼婦役での彼女の素敵さをタップリと！

■たしかにメロドラマ風！しかし、これはこれでグッド！■

本作は『太平輪』『The Crossing』というタイトルからわかる通り、「中国版タイタニック」と呼ばれる映画で、1949年に実際に起きた大型客船「太平輪号」の沈没事故を題材として作られたもの。しかし、そのクライマックスを迎えるのはPart II。Part Iでは国共内戦が激化し、次第に国民党軍が劣勢になる中での3組の男女の恋を描くものになっている。そして、「不穏な時代ほど愛の偉大さは際立つ。」もの。ジョン・ウー監督はそんな信念の下に、Part Iでは3組の男女の恋模様をまさにメロドラマとして大河ドラマの中に描いていく。

そのためのテクニックがナレーションの多用。そして、その小道具になるのが手紙や日記だ。とりわけ、メロドラマの色彩が強いのは、巖沢坤と日本女性の雅子（長澤まさみ）との恋模様。巖沢坤は学生時代に父親の仕事の都合で台湾で暮っていた日本人の娘、志村雅子と出会い、2人は互いに心を通わせた。そして、夫を亡くして苦しい生活の中、巖沢坤の母親は自分の嫁入り道具だったピアノを雅子の家に売り、息子たちを支えていた。しかし、召集令状を受けた巖沢坤は、日本軍の軍医として大陸に渡ったため、雅子と別れることに。そして、その日から雅子は、額の裏に隠したあの日記を書き始めたらしい。周蘊芬が未完成の楽譜と雅子の日記を発見した後、巖沢坤と志村雅子のラブロマンスがスクリーン上で展開されるが、それはほとんど長澤まさみのモノローグになっている。

長澤まさみは『キングダム』（19年）では「山の民」を武力で束ねる美しき「山界の王」の役（『シネマ43』274頁）を、直近の『コンフィデンスマンJP』（19年）では“ダー子”の役を演じているが、本作ではメロドラマのヒロインに相応しい日本人令嬢役だ。もっとも、これは金城武と違って日本語しかしゃべれない長澤まさみの限界があるため。行方不明になった恋人を上海で探し求めながら娼婦に成り下がってしまった于真は、Part IIでは太平輪号に乗り込むし、佟大慶も雷義方の手紙を周蘊芬に届けるため太平輪号に乗り込むから、Part IIでも大きな役割を果たす。それに対して雅子は？本作は3組の男女の恋を描くものだが、巖沢坤と雅子の恋模様だけは、手紙のやりとり（？）と日記の朗読によってしか展開しないため、少し影が薄くなっているが、それはやむを得ない。ちなみに、本作では、黒木瞳も起用されているが、そのシーンも少しだけ。そう考えると、Part I、IIを通して本作では日本人のウエイトが小さいのが少し残念だ。

■□雪の中で孤立した国民党軍は？雷義方の日記は？■□

『太平輪』Part Iのラストでは、冒頭の人民解放軍との戦いで華々しく勝利した国民党軍の指揮官・雷義方が、上層部の「持ち場を死守せよ！」との馬鹿げた命令のために雪の中で孤立し、敗北感を深めていく情景が描かれる。トルストイの小説を映画化し、オードリー・ヘップバーンがナターシャ役を熱演した『戦争と平和』（56年）でも、五味川純平の小説を映画化した仲代達矢主演の『人間の条件』（59年～61年）6部作でも、雪の中で孤立していく軍隊は悲惨なものだった。『レッドクリフ』のハイライトになる『赤壁の

戦い』でメチャ面白い映像を見せてくれたジョン・ウー監督が、本作では飢えた兵士たちに少しでも報いるべく、雷義方が自分の愛馬を射殺して食肉として提供するシーンが登場するが、それを見ていると思わず涙。人民解放軍の指揮官が内々に雷義方を訪れて降伏を勧めたが、雷義方には「降伏」の2文字はなかったから、もはやどうにもならない。

雷義方がここで戦死してしまっただけでは、さまざまな雷義方の思いを台湾にいる周蘊芬に伝えることができなくなってしまうが、彼の側には何かと心が通じ合った通信隊長の佟大慶がいたから、ひと安心。足を負傷し死を悟った雷義方は、抗戦中に綴った一冊の日記を周蘊芬に届けてもらうべく、佟大慶に託することに。

かくして、この激戦（敗北戦）で負傷しながらも命だけは何とか助かった佟大慶は、台湾を目指して上海を出港する太平輪号に乗り込むことに……。

■□■1949年1月27日出港の大平輪号の乗客は？■□■

私の誕生日は1949年1月26日だが、上海と台湾を結ぶ大型客船・大平輪号が最後に上海から台湾の基隆港に向けて出航したのは1949年1月27日。中国では春節（旧正月）だ。パンフレットによれば、この便には定員を大きく超える約1000人の乗客の他、銀行の重要書類1000箱と銀貨200箱、東南日報の印刷機材と用紙100トン、鋼材600トンなどが積まれていたため、明らかに過積載だったらしい。ちなみに、1912年4月10日にイギリスのサウサンプトン港を出発した豪華客船「タイタニック号」の処女航海の乗客・乗員は2224名で、正規の数だった。もっとも、ジャックは、賭けポーカーで勝って正規のチケットを手に入れてタイタニック号に乗っていた。

それはともかく、この太平輪号には、菓の仕入れのために上海に渡っていた巖沢坤が乗っていたし、負傷兵は台湾に送られると聞いた于真も乗っていた。また、顔面を負傷しながら雷義方の日記を台湾の妻・周蘊芬に届けるという大事な任務を果たすべく、佟大慶も乗っていた。更に、上記の銀行関係の書類や銀貨等はバンカーである周蘊芬の父親が台湾に避難するに伴って運んでいるものだったし、于真が夫と子供がいるとウソをついてやっと「下宿」させてもらっていた家の家族らも乗っていた。

1943年8月からずっと国民政府（後の中華民国）の第5代主席だった蒋介石がそれを辞任したのは1948年5月20日。毛沢東率いる共産軍の南下が早まる中で、上海では学生たちの「内戦を止めろ！」等のスローガンを叫ぶデモ行進が強まり、上海の治安はかなりヤバイ状態だ。そんな中、太平輪号は威風堂々と（？）出航したものの、灯火管制の下、航海灯を消して航行。しかも、航内は春節を祝う宴が至るところで催されていたから、乗組員たちも浮かれがちだった。まさか、飲酒運転（航海）はないと思うのだが、さて太平輪号の運命は？その詳細はPart II「太平輪 彼岸」でたっぷりと。

2019（令和元）年6月14日記